

# 「陸奥話記」を「和田家文書」と対比して共に読む

菊地 栄吾

## 1. 『陸奥話記』 梶原正昭、現代思潮社

『陸奥話記』は11世紀中葉、東北地方に起こった俘囚の反乱、世にいう「前九年の役」を題材とした実録的作品として流布・定着しております。

梶原正昭校注による『陸奥話記』は原文と読み下し、注記より構成され、さらに参考文献、関係資料を添付しております。これらの資料により「前九年の役」に関する一般的なデータは揃っていると思われます。しかし、和田家文書に目を向けると膨大な資料が残っているのです。

梶原校注本には、原文には無い、「章段の区分」を次のように付記して整理しております。

「俘囚の長安倍頼良叛す」「追討將軍源頼義の登場」「安倍頼良帰順す」  
「阿久利河の事件」「頼義、平永衡を斬る」「巨理経清の離反」  
「頼義重任し征討に努む」「黄海の戦い」「佐伯経範の奮戦」「藤原景季の忠死」  
「和気致輔・為清らの奮死」「藤原茂頼の忠節」「平国妙捕わる」  
「頼義苦境を訴う」「清原光頼に援を求む」「頼義軍容を整う」  
「小松の柵攻略」「官軍霖雨に遭い飢えに悩む」  
「貞任勢の反撃、武則勝利を予言す」「官軍奮戦して大勝す」  
「頼義負傷者を見舞う」「武則奇襲し貞任勢を破る」「衣川の関を攻略」  
「鳥海の柵を攻略」「厨川の柵を攻略」「巨理経清虜殺」「貞任の最期」  
「安倍一族の運命」「頼義戦捷を報ず」「武則義家の弓勢を試む」  
「貞任等の首入洛」「論功行賞」

以上の内容となっておりますが、和田家文書には無い記事も多数記述されております。これについて『陸奥話記』の原書者は「今國解の文を抄し、衆口の話拾ひて、之を一巻に注す。少生但し千里の外たるを以て、定めて多く糺繆せん。實を知る者之を正すのみ。」と結びで述べております。これを意識すると、次のようになります。

「国解の文」は国府から中央官庁に上申される報告文書で、その中から必要な部分を抜き出し、さらに「衆口」すなわち、多くの人々の口から語られている話を纏めて、一巻の書として書き留めた。その中には、多くの誤や間違いがあるだろう。事実を知っている人はこれを正して欲しい。

『陸奥話記』の成立年代については、梶原氏は永積安明氏の説を紹介しています。作者が京都にありながら、間接的にはあっても、動乱のなごりが、まだ都にある人々の胸に深い感動をとどめていた時期に、つまり前九年の役が終結し、貞任らの首級が都に到達した康平六年(1063)二月からほど遠くない

時期に書かれたものであると考えられる。

## 2. 和田家文書

和田家文書には、「前九年の役」に関する文書は多数ありますが、集中して述べておるものを次に挙げます。

### (1) 東日流六郡誌大要 八幡書店

- ① 東日流六郡誌考察図(p100~108) 「絵図」  
「起前九年之役」「安倍八郎則任移東日流十三湊」「源頼義之敗走」  
「日本將軍安倍頼良之討死」「厨川大夫安倍貞任之武威無敵」  
「出羽冠者清原一族之反忠」「衣川之合戦」  
「厨川大夫貞任自決一子 千代童丸添是」「貞任之高星落東日流藤崎」
- ② 「日河水月」(p251~252) 元禄十年(1697)八月 藤井伊予
- ③ 「罪談義」(p253) 永承二年(1047)六月一日 頼良
- ④ 「衣川問答」(p358~360) 元禄十年(1697)八月 藤井伊予
- ⑤ 「祖先之事」「中祖之事」 寛徳甲申(1044)参月 頼良
- ⑥ 肖像図「安倍致東」(p635)、「安倍頼良」(p636)
- ⑦ 「安倍安東秋田氏遺跡八十八景記」  
「第三十二番~第四十番」(p825~829)(p891~899)  
「雄勝厨川柵跡図」「小松柵跡図」「川崎柵跡図」「鳥海柵跡図」  
「栗原一乃迫古戦場跡図」「阿津賀志山古戦場図」「阿久利川古戦場跡図」  
「衣川柵跡図」「遠野貞任山図」

### (2) 東日流六郡誌・全 津軽書房

- ① 日之本將軍安倍頼良(p189~192)  
「東流日石塔山之立君」 寛政十年(1798)十二月 秋田孝季  
「安倍日之本將軍之宣」 永承丙戌元年(1046) 日下太郎頼良
- ② 安倍王国滅亡之記(p195~209)  
「頼良賦貢断絶之宣言」 寛政十年(1798)十二月 秋田孝季  
「東夷之酋長安倍頼良」 寛政十年(1798)十二月 秋田孝季  
「日之本將軍頼良遺言」 天喜丁酉五(1057)年二月 頼良  
「大將軍鳥海柵之闘死」 寛政十年(1798)十二月 秋田孝季  
「衣川・厨川断腸之賦」 寛政十年(1798)十二月 秋田孝季  
「厨川大夫貞任之遺言」 康平壬寅五年(1062) 貞任  
「安倍則任之十三湊移住」 文政三年(1820)六月 藤井伊勢

(3)東日流外三郡誌・第一巻古代編 北方新社

- ①恨靈之賦(p486~487) 元禄十年(1697)八月一日 藤井伊予
- ②陸奥風雲録(p492~494) 寛政五年(1793)十月 秋田孝季
- ③祖尋録(p495~496) 元禄十年(1697)六月二日 秋田頼季
- ④安倍一族偲史(p501~503) 元禄十年(1697) 安東頼季
- ⑤阿修羅絵図抄(p503~516) 元禄十年(1697) 藤井伊予
- ⑥安倍次郎貞任遺文(p518~520) 康平五年(1062)正月 次郎大夫貞任
- ⑦安倍頼時之遺文(p520~521) 天喜元年(1053)五月二日 安倍日高見之介頼良
- ⑧東日流往来記(p526~527) 宝永五年(1708) 相川民治郎
- ⑨阿修羅絵図抄(出典、著者名なし)
- ⑩安倍一族の月影抄(p539~543) 寛政五年(1793)八月一日 秋田孝季
- ⑪秋田一族公史抄(p546~550) 寛政五年(1793) 秋田孝季
- ⑫日下將軍系書(p556~562) 寛政五年(1793) 秋田孝季

(4)和田家資料 1~4 北方新社

「和田家資料 1」

- ① 奥州五十三郡風雲録(p53~69) 寛政六年(1794)八月二日 秋田孝季
- ② 安倍一族之顛末記(p82~84) 享保元年(1716)十月一日 守江豊後忠季
- ③ 厨川柵落之談(p281) 寛政五年(1793)三月七日 秋田孝季
- ④ 伊治沼之談義(p301~302) 宝曆丙子(1756)八月三日 帯川太治郎
- ⑤ 頼義策略不為(p315) 永治辛酉年(1141)七月 小野寺志摩

「和田家資料 2」

- ① 「良照入道之説法」(p135~136) 康平五年(1062)四月三日 安倍入道良照
- ② 「丑寅日本国草枕」(p184~185)
  - 「一之記」 永承壬辰年(1052)弥生十日 奈加之前
  - 「二之記」 永承壬辰年(1052)猛春七日 安倍衣川大夫頼良
  - 「三之記」 天喜甲午年(1054)八月三日 極楽寺入道良照
- ③ 「陸奥物語(p257~265) 元和二年(1616)三月六日 書写 林氏手澤  
「陸奥話記」の内容と同じもの
- ③ 通説陸奥之役解(p265~267) 寛治元年(1087)一月一日 源太郎次郎書

「和田家資料 3」

- ① 厨川夜話(p253~255) 寛政五年(1793)七月三日 蠣崎与一郎
- ② 閉伊物語(p255~257) 文化元年(1804)七月三日 由利友久

「和田家文書 4」

- ① 良昭状・頼良状(p248) 天喜四年(1056)五月七日 良昭・頼良
- ② 北斗抄・十九「諸翁聞取帳・四」(p256~259)  
寛政六年(1794)七月一日 生田清之
- ③ 北斗抄・二十二「頼良立君之事」(p375~376)  
寛永二年(1625)八月一日 前田頼母

「和田家文書 5」(ネット版)

- ① 「陸奥史審抄全」・「反忠因縁抄」 寛政癸未年(?)三月一日 清原越中
- ② 「安東氏諸書綴全」 「頼良状」 天喜四年(1056)五月六日 頼良
- ③ 「安倍古事録、一~五」 寛政五年(1793)十月二日 秋田孝季

(5)「北鑑」(ネット版)

①「全」

- 「頼良口上一」 天喜三年(1055)八月一日 頼良  
「頼良口上二」 天喜四年(1056)六月一日 頼良  
「頼良口上三」 天喜五年(1057)二月一日 頼良  
「頼良口上四」 永承癸巳七年(1052?)二月 頼良  
「頼良口上五」 永久癸年(1113)四月七日 頼良

②「第六巻」

「陸奥考」 文政二年(1819)五月一日 和田壱岐

④「第八巻・付記」

- 「頼良口上」 長暦戊寅歳(1038) 頼良  
「護持玉書」 萬寿甲子歳(1024) 頼良  
「頼良遺言」 天喜丁酉(1057)九月十九日 頼良

⑤「第九巻」

- 「安倍頼良衣川詠」 天喜甲午年(1056)八月三日 頼良  
「宗任記」 康平二年(1059)八月十五日 宗任  
「良照説法」 天喜二年(1054)四月八日 良照

⑥「第四十巻」

- 「良陸奥物語・第一巻」 文正丙戌年(1466)五月七日 千葉民部介  
「陸奥物語・第二巻」 文正丙戌年(1466)五月七日 千葉民部介

- ⑦ 「第四十一巻」  
「陸奥話記」 寛政元年(1661)辛丑陽月 向陽林子  
「陸奥話記」の内容と同じもの
- ⑧ 「繪巻五」  
「丑寅日本國史」総修編

(6)和田家文書・コレクション(ネット版)

- ① 「丑寅風土記 5」「頼良状」 天喜二年(1054)八月十日 衣川大夫頼良
- ② 「衣川風土記」 永楽癸未年(1403)九月十九日
- ③ 「安倍古事録」 寛政五年(1793)十月二日 秋田孝季

以上

## 「陸奥話記」と「和田家文書」(1)

### 「陸奥話記」1・「俘囚の長、安倍頼良叛す」

(陸奥話記) 六箇郡の司に、安倍頼良といふ者あり。是れ同忠良が子なり。父祖忠頼は、東夷の酋長なり。威名大いに振ひ、部落皆服す。六郡に横行し、人民を劫略す。子孫尤も慈蔓せり。漸く衣川の外に出て、賦貢を輸さず。徭役を勤むることなし。代々驕奢、誰人も敢えて之を制すること能はず。永承の比、太守藤原朝臣登任、數千の兵を發して之を攻む。出羽の秋田城介平朝臣重成、前鋒たり。太守は夫士を率ゐて後たり。頼良は諸部の俘囚を以て之を拒ぐ。大いに鬼切部に戦ふ。太守の軍敗績す。死する者甚だ多し。

(文書 1-1)「安倍頼良之浄法寺建立」(東日流六郡誌・全、p185~6)

安倍日之本將軍頼良は、始祖耶馬止彦王より二百二十九代、安日彦より百七十六代、安倍安国王より十一代の荒霸吐王なり。寛弘四丁未年(1007)八月、日高見国の北、荷薩丁の地に安日山浄法寺を建立落慶せるが、建立願文は次の如し。

#### 安日山浄法寺建立願文

日高見国荷薩丁比叡邑日下將軍安倍頼良、安日山浄法寺を建つるを発願す。一族を挙げ勸進を發起せり。趣意は故荒霸吐王安日彦王、舍弟富長髓彦王代々菩提のためなり。よって山号を安日山となし、寺号を浄法寺と号す。趣意は五佛中尊法壇金剛界胎藏界本願佛頂を念ずる故なり。本願成就のため一族衆生みな心ひとしく労を捧げ心を尽し財を施し、ここに寛弘甲辰元年八月十二日、寺棟建立奉る。佛壇内陣には大日如来、阿弥陀如来、阿闍如来、薬師如来を安置し給ふなり。中尊丈六尺、四尊八尺の像なり。佛壇の中に秘尊金剛不壞摩訶如来、金剛藏王権現、法喜大菩薩、荒霸吐神、西王母神、伏羲神、女媧神、比趣怒神、紫婆神の等身尺像を秘神佛となす。唐僧款徹、高麗僧天白、日高見国に帰化をなし、安倍祖先菩提供養のために寺住す。

寛弘丁未年(1007)八月十二日 日下將軍胤 頼良

(文書 1-2)「頼良立君之事」(和田家資料 4「北斗抄二十二」、p375~6)

日本將軍安倍頼良い亦の名を和賀太郎と曰ふ。館、江刺に築き、是を岩谷柵と称し、産金の実を挙げたり。物見山に道造り、人首に山関を為し、余人の往来を断て江刺川を道とせり。古きより黄金の出づる山と世風にありきも、その鉞にぞ当りし者なく、頼良をして得たり。この産金に依りて、江刺をして市をなせる。馬産の隆殖また実を挙げたり。

職人住はせ、鍛冶、鞍造、具足師をもつて六郡に産物を流通せしめ、頼良、居を金崎川中島に館、築きたり。日高見川を川舟に石巻湊に往来し、その商益を得たれば桃生に館を築き、江合川往来を鳴子に至る川舟の産物を益したり。依て、多賀城にては、これをよしとせず。防人、常にして鹿島台に砦を築きて威勢を張りつるも、何事の退目無かりき。依て、涌谷に川関をなせば、安倍頼良、軍、六千を挙兵し、桃生に駐留せしめたり。

依て、多賀城の防人、川関を解き、その往来自在たり。頼良の子、頼良、父立君の後に生まれしも、弟、道照亦の名を良照、俱に奥州六郡の支配に及ぶるは、江刺太夫頼良の威勢に依れるものなり。頼良属下に羽州清原氏、陸前の鳴瀬氏、磐城の朝日氏等、頼良に従卒せりと曰ふ。

寛永二年(1625)八月一日 前田頼母

(文書 1-3)「東日流石塔山之立君」(東日流六郡誌・全、p189~90)抜粋

安倍頼良、ときに思ひみるに、一族の地領ぞ、徒らに倭国の輩に侵略せらるる憂ひあり。故に、白河を境とし、西は糸生川、東は鹿島に至る北領をば、改めて日之本領とて宣し、かかる地内に駐在せる倭朝の官人をば、ことごとく追放せり。

日之本將軍治下たる荒覇吐王国にては、先主頼良の代より、一族に縁る臣らに、その地領を内分なし、館を築むかしめ、地治の任に当らしめたり。頼良の代の安倍武鑑をみるに、配さるるは、厨川に雄勝太夫二郎貞任、鳥海に弥三郎宗任、飽田に城之介家任、その北浦に六郎重任、黒沢尻に五郎正任、東日流に白鳥八郎則任、糠部に江刺太夫良宗、荷薩丁安代に浄法寺沙門井殿(井殿は長男なるが盲目なり)らにて、すべて、おのが子息なり。

頼良には兄弟の多く、川崎に小太郎幸盛、胆沢に十郎兼重、前澤に次郎道直、白河に小五郎光頼、鹿島平右衛門忠長、石川に八郎又重、田村に小次郎貞広、菊田に兵左衛門実親、磐前に玄左衛門秀則、柏葉に彦右衛門將継、標紫に十郎太元清らを配したり。

叔父、分家衆らも各地にありて、行方の安倍四郎直日、宇多の安倍勝頼、伊達の安倍行友、亘の安倍権太夫、斗南の安倍則一、大沼の安倍忠景、河沼の安倍吉基、耶麻の安倍兼盛、岩瀬の安倍輝成、安達の安倍是一、安積の安倍行家、信夫の安倍貞重、刈田の安倍頼邦、伊具の安倍広光、柴田の安倍彦成、名取の安倍清武、宮城の安倍勝成、黒川の安倍正頼、加美の安倍重成、玉造の安倍藤季、志田の安倍又一、遠田の安倍英頼、栗原の安倍忠家、登米の安倍景盛、牡鹿の安倍吉祐、桃生の安倍頼松、本吉の安倍直則、磐井の安倍貞基、和賀の安倍成広、紫波の安倍光盛、稗抜の安倍時継、村上の安倍正吉、最上の安倍道長、田川の安倍高清、飽海の安倍頼継、由利の安倍胤盛、矢巾の安倍尊朝、高清水の安倍家貞、

平鹿の安倍直家、山本の安倍忠時、川辺の安倍盛継、村山の伊貝永衛、庄内の清原武則、さらに、常陸の結城貞利、上野の胴生忠景、下野の鹿沼頼秀、下総の佐原基成、上総の本納伊頼、安房の館山久光、岩代の俵貞堯、相模の坂東家継。武蔵の桶川長広、越前の堀部亥内らが臣とて名を連ねたり。

これら一族、もし、全兵挙軍ともあひ成りければ、十五万騎を越ゆといふなり。

寛政十年(1798)十二月 秋田孝季

(文書 1-4)「良陸奥物語・第一巻」(北鑑・第四十卷)抜粋

陸奥國古くは日本國と曰ふ六四箇郡の司に安倍頼良なる者あり。是、安倍頼良の子也。父祖・安倍忠頼亦の名を國東と曰すは丑寅日本將軍にして威風堂々たり。能く地領を治め、民また能く服す。子孫五十六郡に分布し、坂東に出でんとす。倭國常に此の國を犯し、防人を以て祖來地産の金鑛・産馬を倭朝の賦貢と請誘せるも、國もとより倭に非らざれば賦貢を輪ばず。侵入の倭人を封じて入れず。倭朝にして是れを征する事能はざるなり。

永承丁亥年(1047)。倭の太守藤原登任と曰す者二千騎の兵を挙して衣川太田の御館を攻む。亦、出羽秋田城之介平重成を以て先鋒と為し、登任夫子を卒いて後に相成りければ、安倍氏急ぎ羽州の左京權太夫清原基光の嫡子・兵部大輔清原光方に使者を遣し、是れに攻討たむを令ぜり。依てその子息ら長子光頼・次子武則・三男武道ら、眞武呂より小國川を鬼首峠越ゆ。挙兵八百騎・七百の徒兵にて宮澤・鬼切部・鳴子に三陣を楯垣せる登任軍に、安倍軍一迫より鳴子邑に五百八十六騎にて攻むれば、清原軍宮澤に時を合せて突撃す。登任是れに敗績し死者一千二百をいだせも、先鋒にありき平重成が卒ゆる二千の兵至らず。鳴子にて苦戦し陣を保たれず。江合川を敗走して遁げ失せし、生存の者少かに三百十一人なり。時に平重成、及位にて戦の敗報を聞きて軍を退き秋田に歸遁せり。世に是を鬼首の乱と傳ふなり。

文正丙戌(1466)五月七日

千葉民部介

(文書 1-5)「陸奥考」(北鑑・第六卷)抜粋

永祚己丑年(989)、日本將軍安倍頼良逝き、その嫡男忠良五十歳にして継ぎける。忠良とは襲名にして頼良とも稱し、また父頼良なる實名ぞ國東と稱するは誠なり。國東に三男一女あり。長子を忠敬、次子を頼良、一女を辰姫、三男を良治と稱せり。長子忠敬は十九歳にて天慶庚子年(940)、平将門に客戦に葬じられたれば次男、父襲名にして頼良また忠良とも書きけるありきも、諸史に國東の次子頼良と書く多し。

頼良の代にては泰平にして、長曆戊寅年(1038)、頼良逝きてその長子頼良継ぎぬ。

文政二年(1819)五月一日 和田吉岐



## 「論考」

『話記』には「六箇郡の司」と言うが「日之本將軍」の事であり、「安倍頼良」の父は「安倍忠良」祖父は「安倍忠頼」とあります。また「藤崎系図」「秋田家系図」には國東、頼良、頼良としています。これに対し、『文書』からは次のような系図が想定されます。

國東(忠頼)―頼良(國東)―忠良(頼良)―頼良 ( )内は襲名

「國東」の初見から四代で、二百年以上もの時代を経過しているのです、その間にも襲名した將軍も考えられます。

弘仁二年(811)に、「三十八年戦争」が終わり、大和朝廷の東国支配も変化し間接支配となります。この頃、承和十一年(844)に安倍国東が日之本(日下)將軍を継承します。

承平五年(935)に、「平将門の乱」が起り、安倍頼良は父・国東の下に平将門に援軍するも敗れます。しかし「乱」が終わり将門一族を収用した安倍国東は大和(倭)国の侵領に備えて、城柵を構築します。倭国側の城柵は徳丹城を最後として機能を停止しており、安倍国東は、「平将門の志」を引き継ぎ、独立国としての丑寅日本・日高見国の再構築を計ります。

さらに、天曆六年(952)、白河に陣を造り倭人の入国を禁止し、改めて防御を強化するため各地に柵を築きます。安和二年(969)には、安倍頼良が日之本將軍になり一族を挙げて各地に拠点を造ります。そして、寛弘四年(1007)には荷薩丁の地に「安日山浄法寺」を建立し荒覇吐族・安倍氏一族の安寧・団結を計ります。

その後、長和三年(1014)に安倍頼良が日本將軍となり「白河を境とし、西は糸生川、東は鹿島に至る北領をば、改めて日之本領とて宣する」程になります。そして領内には金鉾の開発、馬産の隆盛、職人の育成を画り、国力の繁栄をめざします。

これに対し、大和政権は「六郡」のみならず、坂東にまで勢力を拡大し、その上「賦貢、徭役」を拒否する「俘囚・安倍頼良」の追討を計画します。

先ず、永承二年(1047)に、太守藤原朝臣登任の兵・二千騎で安倍氏の衣川太田(平泉町太田川付近)の「御館」を攻めるが、藤原登任は文官で老令でもあり、成果を挙げることは無理であったようです。そのため、援軍として出羽の秋田城之介である平重成に出動を要請します。平重成は桓武平氏であり武門の将として藤原登任軍の応援に駆けつけます。

一方、安倍氏側では出羽清原氏に出動を依頼し、清原軍は鬼首峠を越えて鳴子に至ります。安倍軍本体は一迫より鳴子を攻めると共に、清原軍は宮澤に向かい登任軍を攻撃します。これにより、援軍であつた平重成軍は間に合わず、登任軍は惨敗し江合川を敗走します

この戦いは「鬼切部の戦」「鬼首の戦」として伝承されております、しかし、出羽清原軍は「鬼首峠」を通って鳴子邑に至ってはいるが、「鬼首峠」では戦闘はなかったようです。戦闘場所は「宮澤」「鬼切部」「鳴子邑」の三地点であり、「鬼切部」は「アテルイ・モレ」

の「鬼死骸伝説」のある所で、「田村神社」もあり大和政府側の拠点になっていたと考えられます。『文書』では「鬼切部」と「鬼首」とは明確に区別して記述しております。

以上

